

# 写真・ナラティブ誘出法 (PEN-A : Photo Eliciting Narrative Approach) による中高年の地域コミュニティへの 意識と地域における活動の把握

—— 京都市中京区西ノ京・壬生地域における調査 ——

石 盛 真 徳  
岡 本 卓 也  
加 藤 潤 三

## 1. は じ め に

本研究で調査対象とする京都市中京区大宮通以西の西ノ京・壬生の住宅地域は、これまでも自治会や町内会といった伝統的な地縁団体を中心としてまちづくり活動がある程度は活発に行われながらも、住民一般の参加が必ずしも十分ではないという日本の都市部に共通してみられる問題を抱えていた。そして、この問題は地域の高齢化が進む現状において、本研究の調査対象地域のみならず、日本全国でより一層深刻になりつつある。高齢化問題については、内閣府を中心に全国レベルの意識調査が数多く実施され、高齢者の生活実態や地域コミュニティへの参加に対する意識などに関する統計的資料が多く蓄積されてきている(内閣府, 2014)。また、昭和55年度からは5年ごとの国際比較調査も内閣府によって行われ、他の国と比

較した日本の高齢者の役割・活動や意識などが時系列的にも検討されている（内閣府，2014）。ただしこのような高齢者の地域生活の実態調査は，基本的には，調査者の側であらかじめ設定した質問項目について，高齢者に質問を行う形式のものがほとんどであり，高齢者個々人の生活に密着した観点から報告されるデータを基にして居住地域における高齢者の生活問題が論じられることはあまりなかった。しかしながら，いうまでもなく高齢者は長年に渡ってその地域で暮らしてきた人々なのであるから，その人達なりの地域に対する理解のしかたというものを形成しているはずである。そしてそうであるなら，高齢者が地域生活の中で，その地域の特性と対応してどのような地域コミュニティに対する意識を形成し，また，いかなる地域資源を利用して日々の生活を送っているのかを把握することが，彼らの生活世界の理解にとっては質問紙調査に基づく客観的な指標と同様に重要であろう。そこで，われわれは高齢者の地域コミュニティに対する意識や地域における活動の実態を明らかにすることを本研究の目的として，参加型の写真調査法を用いてデータ収集を行うこととした。

調査参加者自らに写真を撮影してもらう形式で実施される参加型の写真調査法は，参加者の調査への関与度を高めるためには非常に有効であることが，写真を利用した研究において共通して報告されている（e.g. Harper, 1988; Wang & Burris, 1997; Ziller, 1990）。さらに，参加型の写真調査法は，参加者が子どもや高齢者，あるいは障がい者等であり，通常の言語的報告が困難である場合には，その実施の簡便性からより実用的な方法とされる（e.g. 植村, 1996; Wang & Burris, 1997）。しかしながら，写真を利用した研究法に共通する問題点として，写真という多義的なデータの解釈に際して，必ずしもその分析プロセスを明確化できていないという点が指摘されている。われわれはその問題点を解決するために，写真に撮影されたものを，自己と外界とのかかわりが反映されたものとみることによって，個人の心的世界を把握・理解しようとする方法である写真投影法に面接調査を組み

合わせてデータ収集を行う、写真・ナラティブ誘出法 (PEN-A: Photo Eliciting Narrative Approach, 以下 PEN-A) という新たな参加型の写真調査法を開発した (石盛・岡本・加藤, 2014)。PEN-A は、① 投影的機能と概念化機能 (話題の誘因と深化) や ② 再評価機能と再発見機能 (ふり返りによる環境への気付き) といった写真投影法の持つ長所を生かしつつ、さらに ③ 語りの客体化機能、④ 関係形成機能 (ラポール, 対称的關係の形成) といった追加的な利点を実現している (岡本・石盛・加藤, 2010)。われわれは PEN-A はコミュニティ意識のように高齢者にとってはそのままでは言語化しにくい対象へのアプローチ法としてその真価を発揮すると考えている。なぜなら、地域の具体的な場所でのエピソードに関する思い出語りを含みつつ、対象から少し離れてとらえるという PEN-A の客体化機能や再評価・再発見機能により、その個人の現時点での客観的な理解へもアプローチが可能となるからである。

PEN-A は写真データとそれに付随したナラティブデータを包括的に分析するための研究アプローチであり、一つの論文内で調査参加者すべての写真データの分析結果を詳細に報告することは困難である。本研究の分析で用いるデータのうち、高齢者本人の視点から地域生活を理解するための基礎データとなる部分については、別の論文 (石盛・岡本・加藤, 2014) において報告を行っており、写真とナラティブデータの対応分析の結果、高齢者が配偶者や友人から得ているサポートが友人の日常生活の中で重要な役割を果たしていることなどが明らかとなった。それに対して本論文では、中高年の地域コミュニティに対する意識と地域での活動の実態把握に有効となる写真データに検討対象を絞って考察を行う。また、先述のように PEN-A は関係形成機能として、調査参加者のライフストーリーをスムーズに聞き出せるという調査法としての利点も有しているので、ナラティブにおいて表現された個々人のライフストーリーとの関係も含めて結果の考察を行うこととする。なお中年期の調査参加者のデータについては、高齢

者との比較のためにデータ収集を行っていたが高齢者の地域生活の実態把握の分析（石盛・岡本・加藤，2014）では用いなかったものを，本研究において活用する。

## 2. 研究の方法

### 2.1 調査参加者

京都市中京区の西ノ京・壬生地域に住む59歳から84歳までの男女14名（男性7名，女性7名）に対して，よりよい地域生活を築くための住民活動のための「生活実態調査」という名目で調査に協力してもらった。調査参加者は，京都市が展開する，地域レベルのまちづくり活動のための市民主体の活動拠点である「中京暮らしの工房館」の利用者に呼びかけ，参加の承諾が得られた人々であった。

### 2.2 調査対象地域の社会・歴史的特徴

京都市中京区は大宮通りを境界として，伝統的都心部の東部と西ノ京・壬生地域を含む旧近郊農村地域の西部に区分される。本研究の対象である京都市中京区西部の西ノ京・壬生地域は，歴史的には京都の近郊農村地域であったが，近代都市京都の市域拡大に伴って大正7年に京都市に編入され，都市化が進んだ地域である（京都市情報館，2010）。都市化の進展とともに，丹後地方等の外部地域から多くの労働者が流入したのであるが，本研究の調査参加者のうち最も年齢が上の世代は，昭和初期に移住してきた第一世代の子どもにあたる世代である。中京区西部の大部分は北野天満宮の氏子地域であり，毎年10月に行なわれる祭礼では，北野天満宮を出発した「ずいき御輿」が西ノ京の御旅所に迎えられる。また近年では，JR山陰線二条駅の建替とJR山陰線二条―花園間の高架化工事に伴う大規模な再開工の影響を受けた地域である。

### 2.3 調査時期

2009年10月から2010年1月にかけて調査参加者による写真撮影と撮影された写真についての面接調査を実施した。

### 2.4 調査の方法と手続き

まず、調査参加者に中京暮らしの工房館で調査説明会に参加してもらい、再度、調査の趣旨とデータ利用に関する説明を行い、調査への協力依頼を行った。その結果、調査参加者の候補者全員から承諾が得られた。次にデジタルカメラを渡し、カメラの操作方法を説明したのち、写真撮影について次の教示を行った。「お預けしたカメラで、10日間程度の間、日常生活での立ち寄り先や、お住まいの地域での好きな場所や思い出深い場所の写真をお好きな枚数分、撮影してください。写真のうまい下手にこだわらず、カメラを携帯いただき、思いついた時に撮っていただければ結構です。撮影された写真は、もしうまく撮れていないと思われてもデータを消去されずそのままにしておいてください。」約10日間の写真撮影期間を終えた後に、個人ごとに再度、中京暮らしの工房館に来てもらい、撮影された写真をパソコンに取り込んだ。そして1枚ずつパソコン画面に映し出された写真を共に見ながら、どこを撮影し、どういう場所なのかの確認と撮影理由(どういう意図や気持ちで撮影したのか)、なぜ撮影したのかを尋ねた。面接者は第一著者と第二著者が半数ずつを分担した。なお面接調査においては、現在の普段の生活とこれまでの生活(職業、家族構成、居住年数等)についても質問を行った。面接調査結果については、調査参加者の許可を得て録音した。その録音内容を逐語録化し、写真に対応したナラティブデータとして分析に利用した。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 調査参加者の性別の年齢と撮影枚数

調査参加者の性別ごとの平均年齢および撮影枚数は表1の通りであった。全写真1345枚に対応するナラティブを2名の判定者が独立して読み込み、それぞれが撮影者自身にとって重要な語りがナラティブにおいてなされているかを判定基準として写真の選択を行った結果175枚が重要と判定された。本研究では、その175枚のうちから、調査参加者の地域活動と地域意識の把握に有効な写真25枚を対象をさらに絞りこみ、ナラティブにおいて表現された個々人のライフストーリーとの関係を検討する内容分析の対象とした。また補足的に25枚の写真に対する直接のナラティブではない語りも引用した。

#### 3.2 各調査参加者のライフストーリーと撮影写真・ナラティブ

以下では、各調査参加者によって撮影された写真と語られたナラティブデータのうち、地域コミュニティに対する意識や地域活動の実態把握に有効である写真とナラティブデータを基に、それぞれのライフストーリーとも関連づけて考察を行う。なお、写真に続いて記述するナラティブデータのうち、カッコ内は面接担当者の発言である。

表1 性別ごとの年齢と撮影枚数の統計量

	年 齢		撮影枚数	
	男性	女性	男性	女性
平均値	68.00	70.00	43.71	157.86
中央値	65	66	48	107
最小値	59	55	19	48
最大値	77	84	66	360
標準偏差	8.04	12.64	15.03	122.30

## 〈調査参加者 A〉

A (50代半ばの女性)は商店を営む夫と30年前に結婚したことを機にこの地域での居住を開始した。自宅で営業している商店は夫の父母が昭和6年に始めたもので、Aも結婚以来、接客等の手伝いをしている。調査時に夫が3回目の町内会長の任期中であったため、調査参加者Aはその町内会長の仕事を分担していた。具体的には、店の休憩時間に町内の組長宅に市からの配布物を仕分けして届けたり、マンションでは掲示板に回覧文書を張る作業を行っていた。またAは約15年前から、自宅ベランダに温室を設置してランを育てるなど趣味のガーデニングにも本格的に取り組んでいる。



図1 調査参加者Aの撮影した道路脇の植込み

これはこの交差点の、空き地のところ。あの、植え込みがありますよね。あのところの、植え込みの空いたところなんですけども。このはげたところが気になってしょうがないんですよ、私は。何で気になるかという、この、あの、またほんで新しいのを1年の終わりぐらい、3月ぐらいに植えたりなんかしはるんですけどね。(はい。)結局手入れができへんさかいに、またしばらくしたら、あの、枯れてくるんですよ。(はあはあ。日当たりが悪いとか、そういうわけでもないですね。)うん、やっぱり、日当たりはいいんですけど、水やりとか、そのほら、世話が

できてないから。だからほれやったら、おんなじ焼かんなんのなる、うちにある、このいっぱい、私好きやから。(ああ、なるほど。) 植木を植えてるんですけどね。だからそこへ、植えさせて。植えさせてほしいなあと思うて。もうだからもう要らんもんやら、例えば要らないもんであるとか、もう増えすぎて困るもんとか。ほら、ちょっと挿し木したら、付いたりして増えるんですよ。(はい、そうですね。) うん。だからそのこんな、あの、寒ツバキ、サザンカなんかすごく付くもんやから、こうして植えたらいいのになあと思うて。(ああ、なるほど。) ほんでまあ一遍、市にも電話したことあるんですよ。(はいはい) で、そしたらやけど、あの、「OK ですか」っていうて聞かれたら、「あきません」ってノーということで、だったの。(はあ。) やりたいけど、気になってしょうがないけど、まだ、あの、植えられてないと。(最近ね、道路の周りのね、こういうものの管理ね、そう。地域の方にね、お願いしてるなんていうのもね。) そう。ほんでそれやったらね、グループでね、ちゃんと何とかの会とかいうて会をつくってしなあかんですわ。(ああ、なるほど。) 1人じゃできないわけね。そうそう、そうそう。ほんでもう気まぐれになって、それはあかんのやって。(はあ、そうですね。) だから、だからそれを名前だけでも借りてしょうかなとか、思ったりもしてはいるんですけど。(ああ、なるほど。) でも実際作業するのは1人やし、なかなかね、とか思うて。

図1の植え込みは、Aの自宅兼店舗のすぐそばにあり、毎日目にし、またAの趣味がガーデニングということもあって、その不十分な管理の状況が気になるよというてであった。また単に個人的に気にかけているだけでなく植え込みを管理している市にも働きかけを行い、管理を引き受けることは是非を問い合わせている。しかし組織や団体になら委託が可能であるが、個人には管理を委託できない旨の説明を受け、現段階では、まだ自分以外に活動に積極的な賛同者を得られていないことから、管理にかかる手間を考えてまだ実行できていないという状況である。



図2 調査参加者 A の撮影した美容室の外観

で、これは隣のお兄ちゃんの美容室。(ああ、美容室ですね。)はい。隣の美容室。で、ここもいつも毎朝とか、今までお父さんたちが散髪屋さんしてはったときは何かしょうもない話を、わあわあ、いらんことばかり言うたりしてたけど、やっぱりお兄ちゃんになると、そんなにちょこちょこ出会うへんし、出てはらへんで、何かちょっとやっぱり寂しいなあというような感じで。(ああ、なるほど。)ええ。「元気か」とか、「もうあかん」とか「死にかけてる」とか、そんなことをこういつも言うて、言うてるんやけど。やっぱり……。そのお兄ちゃんとも今は。お兄ちゃんと、やっぱりそれで、まあそこまでは。まあまあそこまでは、そこまではね。「ああ、こんにちは」って「うっとおいしいなあ」とかいぐらいのあいさつで。あいさつぐらいです。

図2の美容室は、Aの自宅兼店舗の隣にあり、近年に経営者が代替わりし、それに伴いAとの近所づきあいの在り方も変化した。Aは先代の経営者とは顔を合わせば冗談を言い合う親密な付き合いをしていたということだが、先代の息子である現経営者とは合えばあいさつする程度の関係になり、そのことを嘆くというほどではないが、「何かちょっとやっぱり寂しいなあ」と述懐している。



図3 調査参加者 A の撮影したマンションの掲示板

で、マンションに、配りもんはここへ、ポストへ入れといて。で、回覧もんとかは、もう回覧いちいちしてくれはらへんし、この2階に上がって、貼っとくんです。(ああもう、Aさんが貼られる?) 貼る。そうなんです。(はあ、そこまで。) そうそうそう、そこまでせな。貼って。だから、べたべたべたべた貼っては替えて。取り替えたりして。(それまでね、ちょっとねえ。) そう。ちょっと結構ハードですよ。あの、ちょこちょこ、うん、細かい仕事、時間かかりますけども。

管理組合のあるマンションには配布物を届けるだけでよいが、図3のような管理組合のないマンションの場合は、それらを掲示板に張る作業まで調査参加者 A が行っている。夫が町内会長を3回も引き受けている理由について、「やっぱり、お商売されている人のところに回ってきやすいというか、そういうことは?」と尋ねたところ、「もう、まあまあそうですね。する人が少ないんですね、やっぱり。当然お一人の人とかが多いもんですから。ほんで、だからだいたい5年に1回ぐらい回ってくるんです、うん。」と説明し、高齢化や都市化で単身世帯が増えていることから、「ちょっと結構ハードですよ。」といいながらも夫と分担して、町内会長の役割を引き受けているとのことであった。



図4 調査参加者 A の撮影した子ども神輿

うーんと、これは、えー、1日の日ですね。(はい。)あ、うちの1軒  
おいた隣に、あの、ずいきみこし(はい、はい。)あの、子どもみこし  
をね、作ってるんですよ。この、まだうちの4カ町ほどで、小さな子ど  
もみこしさんを作って。(ちょっと御旅所みたいな感じになるんです  
ね。)そうですそうです。うん。ほんでこのおみこしさん、これ、中  
のおみこしさんを、ちょっと撮影さしてもろうて。(中略)あの、うち  
の子の小さいころは、あの、お獅子かぶらせてもらったり、旗持ったり、  
はい。してきました。(ちっちゃい子は結構泣くんじゃないですか。)そ  
う。私今でも怖い。あんまり好かんけど。(ああ、そう。ねえ。)ねえ。  
何かちょっと怖いですよ。はい。で、これは、いつも見てるところ  
で、いつも何てことないのに。

ずいき祭りは、千年以上の歴史を有する北野天満宮の祭礼であり、京都  
の代表的な秋祭として知られている。菅原道真公が大宰府で彫った木像を  
随行の西ノ京の神人が持ち帰り祀り、秋の収穫時に野菜や穀物をお供えし  
たのが祭礼の起源とされるため(北野天満宮, 2014), 調査対象地域との関  
わりが深い。そして北野天満宮の本社から西ノ京の御旅所へと巡行するず  
いき神輿の巡行に、地元の町内で作られた図4のような子ども神輿が加わ  
る。Aも図4について「うちの子の小さいころは、あの、お獅子かぶら

せてもらったり、旗持ったり、はい。してきました。」と思い出を語っている。

〈調査参加者 B〉

B (50 代後半の女性) は実家が調査対象地域に隣接する地域にあるため、子どもの頃から調査対象地域を含むエリアを生活圏としていた。B は結婚して数年間は地域外に居住していたが、25 年前に調査対象地域内に自宅を購入し引っ越して以来そこに居住している。また B は自宅で洋裁の仕事をするほかに、新聞とフリーペーパーの配達の仕事もしているため、地域内を自転車で頻繁に移動している。



図5 調査参加者 B の撮影した和風住宅の外観

で、それで、ここの、今の家に引越してきた理由は、こういう、この、こういうふうなお宅が4軒ここ並んでたんです。で、前は東山区に住んでたんで、あの、大和大路通を、こう、四条まで、いつもベビーカーでこう。あの、行ってたときに、その、宮川町。(はい、ありますね。)あります。もう、雰囲気がそっくりだったんですよ。(はい、ああ、なるほど。)もうそれで、もうここにしょって。あの、決めて。ああ。昔の町家が、まあ。そんで、今もう、もう、今その4軒のうち3軒までが、

もう普通の、今のモダンな家が変わってしまいましたけど。(ふん、ふん、ふん。) だからもう、直さんときやいうて。(この1軒だけなわけですね。) そうそう。この1軒だけです。で、ここの道ずっとは、こういうふうな家が全部あったんですって、昔は。

図5は、調査参加者Bが今の自宅に引っ越しきっかけの一つにもなった、和風住宅の街並みを形成していた建物である。ただし、現在はこの1軒だけが残っている状態であり、それだけに、Aはこの建物の住人に対して「だからもう、直さんときや」と述べるように価値を見出している。



図6 調査参加者Bの撮影した鉄道の高架と道路

高架のところでよね。ここを通って帰ります、いつも。(これも、もう、きれいに整備されたのは最近ですかね。高架になったのもね。) そうですね。えーとね、6年、下の子が6年。ああ、13。13年にはならへんな。もう忘れたな。何か、でも、この道がね、大好きなんですよ。これ、何、私、新しい道って言うんやけど。何やら言わはったんやな。安らぎの道って。(はあ、Aさんは新しい道と。) 新しい道としかよう言わん、ハッハ。新しい道が好きなんやねんって言うねん。(ああ。これは、まあ、やっぱり歩きやすいからとか、そういう?) そう、やっぱりこう、落ち着くっていうか。やっぱり同じ通るんやったら、この道っていう感じですね。

図5では自宅前の古い建物に価値を見出していたAであるが、図6ではJR山陰本線の高架化工事に伴整備された道路を「新しい道が好きなんやねん」、「やっぱりこう、落ち着くっていうか。やっぱり同じ通るんやったら、この道っていう感じですね」と、整備された新しい道路を肯定的に評価している。



図7 調査参加者Bの撮影した住宅街からの出口となる階段

そこから、こう、階段。で、昔はここ、山陰線で、線路があつて。こう、渡ることはできなかつたんですけど、この階段、何て言う、消防法かいな。何かのときに、道がなかったらあかんっていうことで、できまして、ほんでこう階段下りて、まあ、家に帰るっていう感じなんですけど。(もう、ここを下りられたらすぐおうち?) すぐ、すぐなんですよ。だから、前はこの間の道がなかったので、すごく遠回りせんことには帰れなかった。(ああ。じゃあ、結構やっぱり便利になった?) 便利は便利ですよ。(中略) そうそうそう、すごく便利ですよ。それで、やっぱり、その、普通やったら、みんなこの、おん、ね、私の前を通過してしか出入りしはらへんかったもんが。この道ができてから、もうさっ

ぱり会わへんになりましたね。(ああ、なるほど。) みんなこっち行かほるから。(ああ、そうか。そうなるんだ。) 「いやあ、おばちゃん元気やった?」とか言うて。「元気よ」とかいう感じで。

図7は図6の新しく整備された道路から住宅街に降りていくための階段である。道路と階段の整備によって住宅街から大通りに抜けるのには、「便利は便利ですよ。」と認めつつも、「この道ができてから、もうさっぱり会わへんになりましたね。」と近所の人との交流が大きく減少したというネガティブな影響にも言及している。



図8 調査参加者Bの撮影した公園

N, N公園ですよ。この公園も昔、汚かったけど。こんな、私ら来た時、よう遊び、遊びましたけど、二条公園のとこにプールがあったんですよ。昔。(はあ、そうなんですか。) そこで、私は、に、あの、中学校の時に、お、あの、泳いでましたもん。学校にプールがなくて、公園にプールがあって、そこで。

図8の公園は、Bの自宅からは少し離れた場所にあるが、「この公園も昔、汚かったけど」と現在のきれいに整備された状況と対比しつつ、

「そこで、私は、に、あの、中学校の時に、お、あの、泳いでましたもん。」と昔の思い出を振り返っている。

〈調査参加者C〉

C (60代前半の女性) は結婚を機に調査対象地域の現在の自宅に居住を開始し、26年経過している。夫が自宅で工業製品の販売店を営んでおり、Cは10年くらい前から経理を担当している。環境問題に関心をもっており、地元の大学生のプロジェクトと連携して、自井戸水を利用した緑化活動を宅屋上で実施している。



図9 調査参加者Cの撮影した自宅の隣のスーパー

あ、これはね、隣にスーパーFができたんです。そしたら、ここもね、前は駐車場やったんですけど。(はい。)スーパーFができて。そしたらね、大変な騒音なんです。(ああ、騒音ですか。)はい。(やっぱり、何が一番、空調?)もう24時間でしょう、ここ営業が。(ああ、なるほど。)そういう出入りとか、そしたら、もうゴーっていう音は、もう、しょっちゅうですよ。それで、ここに、うちのこのベランダとのこの境に、あの、大きな塀をしましよっていうふうに、向こうは提案されたんですね。(はいはい。)ところが塀をされると、もう真っ暗に

なりますし、あの、風も通らないので、もうちはいらないと、うん。  
いうふうに言った、まあそのリスクを負っているんですけどね、ハッハ。

図9はCの自宅の隣に最近営業を開始した24時間営業のスーパーである。Cは「皆さん、お年寄りで1人で暮らしている方は、とても喜んでおられますよね。」とスーパーが地域にあることの利便性は評価しつつも、「24時間を営業されるということについての、私たち、親としての、環境的なことね。せめて12時で終わってほしいなと、思います。」と騒音や惣菜を調理する匂い等の環境面だけでなく、24時間営業であることの教育面での悪影響についても懸念している。



図10 調査参加者Cの地元小学校で開催された「月の夕べを楽しむついで」

それで、あの、それと、もう一つ、私たちはPTAという形ですので、学芸会、もしくは小学校で大きな、あの、卓球大会とか、コーラス大会、とかがあるときは、お茶室を開放して、PTAにお金を出していただいて、私たちはご接待。お茶室を開放して。だから、あの、学芸会は必ず、あの一、見に来てくださった、おじいちゃん、おばあちゃん、とかに、お茶を。今度も11月13日あるんです、けども、もう、これも15年続いていますので、皆さんに喜んでいただいて。(そのサークルが、まあ、

できてからずっと……) はい。だから労力奉仕。

Cは子どもの通っていた小学校でのPTAとしての活動を、子どもが卒業して以降も継続して行っている。Cは子どもが小学校に通っていた時代について「もっと生徒が多かった、うちの娘なんかのときやったらもう150から180。やっぱり、こちら辺も、まあ。少子化でね。もう1クラス、1学年1クラスですからね。」と昔との違いを述べている。



図11 調査参加者Cの撮影したお旅所のずいき神輿

これは、この地域、北野天満宮のお祭りで。(はい。) えーと、11月いっぱい、まあ、ずいき祭りなんですけども、メインは11月、ごめんなさい10月1日から4日。で、このずいき祭りというのは、このずいきさんで(はい、飾るね。)お神輿を作るので、これお参り。で、2日の日は大雨やったんで、3日の日のお昼にちょっと娘と、この子が早く帰ってきたのでお参りに行きました。(これは、もう、天満、天神様で?) いえ、お旅所。(中略)(こちらもじゃ、一応、氏子で?) はい、うちも氏子です。(なるほどね。)で、もう娘もこのお祭りのときに、ずっと、4歳半からお稚児さんでさしていただいて、(やっぱり、お稚児さんってことは、こう一緒に歩く?) はい、巡行するんです。で、その前に、神さんの前で、あの、神事とか。(はい、)それから、踊りがあ

りますので、もう、9月に入ると、八乙女さんという8人の女の子は、舞のお稽古をするんですね。だから、もう5日間は1, 4, 5と出仕しますのえと、8時半ぐらいからもうお化粧をして、1時の巡行に備えてね。大変なんですけど。

Cの自宅も北野天満宮の氏子地域にあるため、ずいき祭りには親しみを感している。特にCは親戚に神社関係者がいるということもあり、娘が幼い頃から北野天満宮本社への巡行に稚児として出仕していたので、現在も毎年お旅所にお参りにいくとのことである。

#### 〈調査参加者D〉

D (60代後半の女性) は約40年前に結婚後、調査対象地域に隣接した地域に居住を開始した。5年前に住宅を購入したことを機に調査対象地域に移った。4年前から、京都市のエコロジーセンターで環境問題に取り組むボランティアグループに参加し活動している。



図12 調査参加者Dの撮影した食品販売店

F食品っていいましてね。もう、むかーしからやっておられて。(も

う何年も通われてて?) もう30年ぐらい。前、一番最初の家からも行けたし、もうおなじみさんで。(中略)(えー、じゃ、このご主人が昔から)。そうです、そうです。もう、若かったいうけど、もうおじいちゃんになりましたね。ま、いまさら、よそにわざわざ行かんでもって感じで。(ああ、そうですか。) お店と。このお店を知ってほしかったから。もう、ほんとに京都市内でなくなりつつあるお店ですね。(ああ、そういう、ま、食料品店。) そうですね、この裏でね。はい。あの、たき物やって。それを作った分をね。(はあはあ。) で、小浜のお魚が、釣った。(はいはい。) もう、スーパーなんか行きません、ここで十分です。

Dは図12の食品販売店を30年以上利用しており、「いまさら、よそにわざわざ行かんでもって感じで」と愛着を表現している。このお店は、新鮮な魚やそれを使ったお惣菜を販売しており、その点が魅力であると語っている。



図13 調査参加者Dの撮影した精肉店と商店街

これも、一応、あの。(商店街?) 生活圏っていうので写しました。お肉屋さん、この、ここ、お肉屋さんで買いました。お肉もスーパーのより香りがいい。(へー、やっぱり専門) 香りを忘れててね。で、今まではスーパーで買ってたんですけど。もう、さっきのF食品のお魚いいうんで、あんなちっちゃな店やのにね。で、ここのお肉、もうほん

とに商店街の中で生活できるようになりました。(うんうんうん。ねえ、ま、残念ながらね、なかなか減っちゃってますけれども。ま、それでも残ってるところは頑張ってるところなんですかね。) そうですよ、うん、ありがたいですね。若い人に教えてあげたいんやけど。(ああ、うん、なかなかやっぱスーパーでね。便利ですからね。) はい。これが、こうね、ズーツと、こう、続いていますよっていう、写しました。(じゃあ、結構商店街は、まあ、いろいろ利用されてる。はい、してます。)

大型で買ってもそう変わりません。大型スーパーで買うと買いすぎるし。結局は無駄ができる。ごみができる。(ああ、やっぱりそういうところも、その、まあ、行くのも車使わずに行けるし、まあ、無駄にもならないっていうことで。) そうそう、CO<sub>2</sub>も出ないし。

D は、魚については図 12 の F 食品で、肉については図 13 の精肉店で購入するというように地域内の商店街で日常の買い物をすましている。その理由としては「大型スーパーで買うと買いすぎるし。結局は無駄ができる。」、車を利用しないので「CO<sub>2</sub> も出ないし」という環境保護意識からの理由と「F 食品のお魚いい」、「お肉もスーパーのより香りがいい」という専門店ならではの品質の良さを上げている。



図 14 調査参加者調査参加者 D の撮影したスーパーマーケットの外観

えー、これはGスーパーといまして。これは、あの、Oの交差点。(はい。)買い物に行きましたので。(別にGスーパーへ行かれたわけじゃない?)行きました。(あ、そうですか。)こういうの、便利なのもあるってということね。(ああ、はあ。やっぱり、たくさん買う場合には、こういうとご利用される?)そうですね。ま、近い、一番近くて。(ああ、そうですか。)何でもそろってる。(先ほどの、F食品なんかとの使い分けっていうのは、どんな感じになるんですかね?)そうですね、ここは、えー、常備の。うん、まあ、砂糖とか。(はいはい。)それから、ま、腐らないものね。ここで買います。ま、どこで買っても同じようなものを。(ああ、なるほど。)ここは安いですよ。(ああ、そうですね。ただ、量がね、結構多い?)多いです、多いです、うん。上手に使ったら大丈夫です。

しかし、Dはスーパーマーケットでの買い物を全くしないわけではなく、図14のような近所にあるスーパーも利用している。その理由としては「常備の。うん、まあ、砂糖とか。それから、ま、腐らないものね。ここで買います。ま、どこで買っても同じようなものを」というように、主婦の立場から購入する商品によってお店を上手く使い分けている。



図15 調査参加者Dの撮影した和菓子店

(これはお菓子屋さん?) はい、お菓子屋さんです。ここでいつもお菓子を買います。お正月もここでした。で、こういうふうなのを撮ったのは、結構この辺ですべてのものがそろいますよ。大きな、あの、スーパー行かなくても。(はいはい。やっぱりね、いっても、街中ですから、まあ、便利は便利ですね。) そうですね。有名な、こういうふうなお店もありますし。ここ本店なんですよ。(あ、そうなんですか。) うん。だから京都駅とか、大丸とか。ああいうとこに行くと、すごいところと混じって、この、この方が出してはるわけでしょう。(はいはい。) わあ、どんなどころやろうと思ったら。すぐ近くにあった。(ああ、そうなんだ、Kね。) そう。今、たいがいのとこのね。ありますでしょうか。(もう、ありますもんね、はい。) そういう、埋もれたんがたくさんありますよ、いいところが。

当然ながら京都には老舗の有名な和菓子店が多く存在しており、またそれらはデパートなどにも出店している。大正期までは京都市の近郊農村であった調査対象地域ではそのような老舗の和菓子店は存在してないが、図11の和菓子店は戦後の創業でありながら、今ではそれらの名だたる老舗と並んでデパートにも出店している。そして、その本店が調査対象地域にあるということで、Dも誇りに感じている。

#### 〈調査参加者 E〉

E (80代前半の女性) は結婚を機に調査対象地域での居住を開始し、57年間居住している。1年前に夫と死別し、現在は一人暮らしである。夫が亡くなるまでは、勤め人であった夫の代わりに義理の両親から引きついだおもちゃ屋兼駄菓子屋を自宅で経営していた。Eは現在もコーラス、随筆、絵手紙の教室に通うなどアクティブに趣味の活動に取り組んでいる。結婚して独立した2人の娘はともに京都市内に居住しており、週に数回はE宅を訪れている。



図 16 調査参加者 E の撮影した町内の地蔵

あ、これはね、1日と15日にね、あの、私ちょうど理事っていう、隣組長ですね、昔の。理事で、お地蔵さんのお掃除しんなりませんねん、役で。で、お掃除しに行ったんですわ。町内のお地蔵さんが、そこ、Mさんのパン屋さんのずっと東行ったところに、お地蔵さんが、北側に、南側に飾ってあるんで、そこのお掃除。割り当てがあつてしに行ったんです。(順番に交代で?) 順番で。1日と15日して、私、4組ですしね。で、次、5組の方が、また1日と15日。また6組がと、こういうになってるんで。はい。(ああ。すごく大事にされてますね。) はい。大事にされて、してはります。

Eは地元で長年に渡ってお店を経営していたこともあり、近隣での知り合いも多い。一人で出かけるのは近隣への買い物等が主であるが、図16の地蔵の管理の役割は、現在でも引き受けている。



図 17 調査参加者 E (80 代女性) の撮影した道路で遊ぶ子どもたち

その帰りしな、ずっと来ると、あの、おまんじゅう屋さんがありますよね。そこで、また何か買ったんかなあ。(まあやっぱり、普段のよく行くところですね?) そうそう。この近所で買わせてもらってるんですけど。そしたら、キャッチボールしてたんですね、子どもが。このちょうど東側の通りですわ。(あっちは、もうあんまり車は通らないんですね?) そうですね。子どもが。昔は、こんな風景いっぱいあったんですけど。(うん、そうですね。) もうないですね。車が通るから、危ない。(特に、ほんとここの道は結構車多いですね。) うん。駄目です。子どもは遊べないですね。

E は自宅地域の子ども向けのおもちゃ屋兼駄菓子屋を経営していたこともあり、買い物帰りに目にした図 17 の子どもたちの遊ぶ風景の写真を撮影したとのことであった。「昔は、こんな風景いっぱいあったんですけど。」「もうないですね。車が通るから、危ない。」と昔を振り返っている。

#### 〈調査参加者 H〉

H (50 代後半の男性) は、生まれてすぐに調査対象地域にある現在の自宅に両親と引っ越して来て、高校卒業までを過ごした。高校卒業後に仕事

の都合で自宅を離れたが、2年前に病気のため仕事を退職し自宅に戻った。現在、再就職活動中である。



図 18 調査参加者 H (50 代男性) の撮影したコンビニエンスストア

それが、あの一、〇通にある、わしがいつも行くコンビニ。いつも行く、行きつけの。行きつけのコンビニ、ハッハ。朝、毎日行っとる。(中略)(そんなに毎日行かれる?) 毎日行ってる。毎日。朝飯やら買いに行くから。

独身で、現在は母親と二人暮らしの H であるが、食事は自分で用意するために買い物に近所によく出かけている。H は高校卒業後、ほとんどの期間調理師の仕事をしてきたため、「今は、まあ、作ることは作るんやけどな。片付けがもう面倒くさーなってもうて。あかんわ、年取ったら。」と食事はコンビニエンスストア等で買ってすますことが多いとのことであった。



図 19 調査参加者 H の撮影した駅前のコンビニエンスストア

駅前のコンビニ。そこもよう行くからな、ちょこちょこ。(はい。)中入っていくから。ここもしょっちゅう通るから、写したんやけど。でも、普段はさっきの、近くのコンビニの方が、ま、よく使ってる。もう、朝、毎日行ってるしな。ここはときたま入るから。(はいはい。) 昼ごろよう入るんや。あの一、あれがあるやろ、あの一、何や、あの、ビルみたいなところが、えー。あ、これ。(はいはい、Bっていう。) この中、この中の、こちら辺にある。(そうですね、あの辺に何か。ありましたね。これも、じゃ、ま、よく行くところ?) うん、行くところよ。ま、散歩。散歩がてら、飯食いに行くところ。(はいはい。) 中に食堂やら、何やかんやあるしな。何かいろいろ。喫茶店とか、それ、そこも写しとるから。わしが行く喫茶店や。

H は高校まで育った調査対象地域の自宅に住んでいるが、現在では高校までの友人との付き合いは全くなく、「わしの生活、そればかりや。」、  
「もう、仕事してへんしな。」というように、普段は買い物のついでに散歩をする日々を過ごしている。

就職活動については、「そんな、入るところあらへん、んな、合うような、おまえ、職業安定所行ったけども、合うようなところあらへん。」「もう、うちのおふくろは、もう、あきらめてる。」と成功する可能性が低いと考

えていた。そして、「今年で、わし、60なるから、今週、今月でもう年金もらえる。あれになるけど。年齢に、ついに。」と今後の生活についての見通しを立てている。

〈調査参加者L〉

L (60代半ばの男性)は、京都市内の勤めていた会社を定年退職し、現在は無職である。調査対象地域にある自宅には生まれた時から居住している。現在は、毎日、勤めていた会社の仕事を数時間ボランティアとして手伝ったり、週に2回グランドゴルフをするなどして過ごしている。



図20 調査参加者Lの撮影したフィットネスクラブ

この写真にも載ってますけど、このプールがですね、この絵でいきますと、Cって言ってますね、ああ、これ。これです。これも家から近いんです。(ああ、ちょっと歩いて。)ええ。ここはですね、フィットネスクラブっていわれてますけど、まあ私はどっちかというとプールで泳ぐんじゃないし歩いて。(あ、はいはい。)はい。そしてお風呂に入って帰ってくると。(ああ、お風呂入って。なるほど。)だいたい1時間40分ぐらいの行程ですね。で、これ、ま、一応基本的には毎日行ってます。はい。(あ、毎日。へえ。)こういうなんも健康にはいいですね。気分的に

もいいですね。(そうですね。)で、もう一つやってることは、グランドゴルフ。(はあはあ、グランドゴルフ。)これもやり出して1年ぐらいになります。(あ、ということはもうじゃあ全部このへんはお仕事辞められてから始めたものなんですか?)そうです。(えっと、ちなみにじゃああと地域での活動っていう意味では、さっき、おっしゃってたそのボランティアで前のお勤め先に行ったりとか、そういう感じですよ?)そうですね、はい。最近ね、これはまだなにも活動してないですけど、最近誘われましてね、町内の方から老人クラブに入らないかというふうに誘われて。それは63ぐらいのときに言われたんですけど、ちょっと自分にも老人クラブという感覚はなかったんでね、ええっ?と思ってね。実は老人クラブというのは60から規約では入れると。しかし、現実に入ってる人はもう数人ぐらいで、圧倒的に70以上の人やということで。今度私8月で65歳になりましたんで、10月から老人クラブに入ります、ということで一応届出しました。で、なにかできることがあったらね、したいなあ。地域でなんかできることがあったらやりたいなあという希望を持っています。

Lは定年退職後のしばらくは、特に何もせずにゆっくり過ごしていたため「自分でも物忘れがきつくなったなあ」と思うような状況であった。しかし、パソコンを習うなどいろいろな活動に取り組むようになると、家族からも「この頃、お父さんいろんなことしたはるけど、全然この頃ぼけが治ったなあ」と言われるようになり、「やっぱりなんかやらなあかん。ね」と考えている。そのような折に、町内の方から老人クラブへの勧誘を受け、「地域でなんかできることがあったらやりたいな」と加入届を出したとのことである。



図 21 調査参加者 L の撮影したずいき祭りの神輿

これはね、例のずいき祭の神輿が始まったところですね。この地図には載ってませんが、ずっと北のほうです。これはもういちおう行政区でいったら中京区です。これも西ノ京で行政区で言ったら、西ノ京ずいぶん広いんですけど、西大路下立売です。住所的にはね。西大路下立売で、神輿の先頭がずっと出発したというところですね。で、京都の神輿は全体的、私も知りましたがね、大人しいんです。いわゆる祇園祭に象徴されるようにですね、あんなでかいもんじゃないですけど、小さいもんにしても岸和田のああいっただんじりじゃないですけど、田舎の御神輿というのはわりかし担いでですね、派手に「わっしょい」いうて暴れたりしますよね。京都の神輿っていうのは平均にももの静かにですね、たんたんと歩くという、練り歩くという感じで暴れたりそういうのはあまりないんですよ。

L が撮影した図 21 は、他の参加者の図 4 および図 11 と同様に北野天満宮のずいき祭りに関連した写真である。調査時期がちょうどずいき祭りの時期と重なっていたため、関連した写真を撮影した調査参加者が多かった。ただし観光客としての視点ではなく、「ちょうど祭やし、ご飯でも食べて、ちらし寿司でも作ってということで、食べて行きました。」というように、年中行事である地元の大きなお祭りとしてとらえている。

## 〈調査参加者 N〉

N (80 代前半の男性) は、結婚後に家を購入して調査対象地域に 50 年以上居住している。現役時代には京都市職員として市電の運転士などを担当していた。定年退職後は、国民健康保険料の集金の仕事を嘱託として行っていた。夫婦 2 人暮らしであるが、結婚した独立した子どもが 2 人とも京都市内に居住しているため孫を連れて遊びに来ることも多い。リハビリ等で週に数回通院しており、遠くの診療所に行くときには妻に付き添ってもらうが、近所へは一人で自転車に乗って出かけている。



図 22 調査参加者 N (70 代男性) の撮影した四条通

(昔はこういう風景で、電車が走ってたんですよ?) と思って撮ったんですよ。(ああ、なるほど。この四条通のところも市電は?) 走ってました。(ああ、そうなんですか。) ここでね、ずっと。(実際、N さんも運転されていた?) ああ、四条通を走ってましたで。ここが一番になくなったんですよ。(ああ、やっぱり交通量が一番。じゃあ、もう最後のほうはやっぱり、こう、車とかなり混雑がひどかったりしたんです)

か?) そら、ひどかったですね。それは、もう、ちょっと、なくなるの  
もじゃあないかなっていうようなところも。まあ、それは、交通規制が  
ないときやからね。そういうふうには言われてましたわな。(ああ、そ  
うですか。運転されている側からはどうですか?) ああ、もう、運転し  
てたら、もう邪魔になるという、あれやったよね。(ただ気を使います  
よね、やっぱり。事故がないか。) はあ、そうです。そやけど、案外ね、  
あの、そういうときはね、気を使うさかいね、事故は少ないんです。  
(ああ、そうなんですか。) それより何にもないようなところが、ところ  
が、スピードをね、出して。

京都での市電が廃止されたのは1978年でありすでに30年以上が経過し  
ているが、運転士をしていたNには、今でも思い出としてその時の記憶  
が鮮明に残っているようである。しかし単なるノスタルジックな思い出と  
してではなく、交通渋滞の悪化を引き起こしていたため「それは、もう、  
ちょっと、なくなるのもじゃあないかなっていうようなところも。」とい  
うように冷静に振り返っている。また「そやけど、案外ね、あの、そうい  
うときはね、気を使うさかいね、事故は少ないんです。」「それより何に  
もないようなところが、ところが、スピードをね、出して。」というように  
実際に運転士の経験を持つ者ならではの視点から当時の状況を説明している。



図23 調査参加者Nの撮影した北野天満宮境内

(天神さんには、この七五三とか以外にも、たまに行かれたりとか?)  
 そうですね。あの一、どうしても氏神さんやからね。よう、ちょこちょこ行きたいんやけど、ちょっと足があんまりかんばしならんで、ああ。このごろはあんまり行きませんけどね。こないだもね、あの一、そうやさ、お祭りのときにね、行ったんですわ。1日の日にね。(はい。)あの一、いわゆる“おいで”ですね。“おいで”の日に行ったらね。あ、初めて、僕が長いことこっちに住んでるけど、あんまり行ったことないし。(はい。)初めておいでの日に天神さん行ったらね、行列のおいでの出発のときにおうてね。ああ珍しなと思ったのは、準備してはってね。行列は、してはんのは、えー、何べんか見たんですけども、出発のときのね、“おいで”の行列の整列してはるとこ見たんが初めてでね。(うん。)天神さんですと、馬も、それから、それから車もね、牛車うちゅうんですか、ずっと並んでね。出発の用意してはったのね、見たですわ。なかなかええもんやなど。

図 23 は北野天満宮の境内であるが、孫の七五三のために一緒にお参りしたとき撮影したとのことであった。ただし N はお祭りや七五三という特別な行事がなくても「どうしても氏神さんやからね。よう、ちょこちょこ行きたいんやけど、ちょっと足があんまりかんばしならんで、ああ。このごろはあんまり行きませんけどね。」と語っているように、北野天満宮を氏神として身近に感じ日常的に参詣したいと考えている。そして健康状態のためそれが実現できていない現状に少し不満を述べている。このような考えは N だけの特別な意見ではなく、今回の調査参加者のうち高齢者の多くは日常的に北野天満宮に参詣していた。

#### 〈調査参加者 O〉

O (70 代後半の男性) は、生まれた時から調査対象地域にある自宅に居住しているが、現役時代の勤務地もずっと京都市内であった。現在は、定年退職後に活動を始めた歴史観光ガイドのボランティアに熱心に取り組んでいる。



図 24 調査参加者 O の撮影した自宅前の道路

(これもご自宅の前?) そうです。水まいたから。(ああ、そうですね、きれいに。向こうはぬれてないのに。) これ、O 通なんです。(ああ、これ、O さんがまかれた?) 私いつも、毎朝、自分の前、掃除はしてるんですけどね、最近掃除をする人が少ななられましたもんね。(ああ、そうですね。) で、ま、やってるからってということないけども、皆さんが、こう、自分の角掃き運動でも、あの一、商店街が率先してされたらいいかなーと。(はい。昔京都はね、道の半分ちょっと越えたぐらいで遠慮しながらやるとかいう話があった。) ハッハ、ま、自分とこの前だけでいいんですよ。それでも違いますからね。

図 24 は O が自宅前の道路を掃除して、水撒きをした後の写真である。O は「皆さんが、こう、自分の角掃き運動でも、あの一、商店街が率先してされたらいいかなーと。」というように、住民の少しの取り組みで地域のよい環境を維持できると認識しており、その中心として商店街が活動することを期待している。



図 25 調査 O の撮影した天神道と JR 山陰線の高架

で、これは、今の、あの一、天神道なんです。(ああ、天神道だ。)はい。南向いて通ってる。ですから、こ、これが今高架になってますけど、これが行き止まりになってて、その、線路またいでたという。(じゃあ、昔はこっちからは直接なかなか、グルッと回って?)ま、近道しようと思ったら、これ上がって行けばいいんですけど。(ああ、上がってく?)危ないですけど。(ああ、なるほどね。まあ、大人だったら別に。)そうそう。けど、逆にね、こっち行っても駅もないから、行くこともあまりなかったといえ。まあ、今はわりかた、こう、行き来ありますね。(そうですね。)ただ昔はね、何もなかったらってこと、あるかも。まあ、天神道っちゅうだけでね。

図 25 の天神道も JR 山陰線の高架が完成するまでは、線路で分断されており、行き止まりであった。O によれば、踏切もなかったため向こう側へ行くには遠回りする必要があったが、電車の本数も少なかったため、大人はそのまま線路を横断することもあったという。しかし実際には「こっち行っても駅もないから、行くこともあまりなかった」という状況もあったようである。また、JR 山陰線の高架工事に伴って 2000 年に調査対象地域からすぐのところに円町駅が新設されたのだが、「やっぱし、写真撮っとかないかんとかね。」と O は駅近辺の写真を多く撮影し、「うー

ん、ここも、昔のイメージとは違いますね。私の友達が、ここでスポーツ屋をやってた、スポーツの、あの、運動具、ね」などと昔の思い出を語りつつ、「ですから、円町駅ってというのは、やっぱりね、あのー、よくなってると思うんですね。」と現状を肯定的に評価している。またOも北野天満宮の写真を複数枚撮影しており、「ですから天神さんは、まあ、毎日私は、あのー、運動がてら行ってますけどね。」と述べていた。

#### 4. ま と め

本研究では、高齢者の地域コミュニティに対する意識や地域における活動の実態を明らかにすることを目的として、比較のための中年期の参加者も調査対象に含めて、参加型の写真調査法の一つである PEN-A を用いてデータ収集を行った。そして調査参加者にとって重要であると判定された写真とそれに付随するナラティブのデータを、個々人のライフストーリーと関連付けながら考察を行った結果、彼らの生活に密着した形で、地域コミュニティに対する意識や地域での活動について、一定程度まで明らかにすることができた。これは、PEN-A が持つ、①投影的機能と概念化機能、②再評価機能と再発見機能、③語りの客体化機能、④関係形成機能方法論という利点が十分に活用された結果であるといえよう。ただし、大量の写真とナラティブデータを適切な統計的分析法を用いて、どのように要約して報告するのかは課題として残されている。この課題については、たとえばすでにいくつかの研究で試みられているように (e.g. Dennis, Gaulocher, Carpiano et al., 2009; Kawase, Kurata, and Yabe, 2012; 大森・羽生・山下, 2013), PEN-A でもデジタルカメラの GPS 機能により取得された写真の撮影ポイントの位置情報データを地理情報システム (GIS: Geographic Information System) 上で整理し、それらの情報とナラティブデータをテキストマイニングで縮約した情報を対応分析等を用いて解析することで、内容分析にと

どまらない統計解析的な分析を精緻化することが可能となるであろう。さて、そのような試みが今後の課題として残されてはいるが、本節では、結果と考察において個別に記述し考察した各参加者の撮影対象および写真とナラティブで表現された地域コミュニティにおける意識・活動の内容について、表2の通りまとめた結果から見出される共通点について検討を行うこととする。

まず、調査対象地域の居住者としての共通性として見出されたのは、彼らと氏神である北野天満宮との関係性である (図4, 図11, 図21, 図23)。もちろん、調査時期が偶然に秋の例祭である、ずいき祭りの時期と重なっていたため、調査参加者がより多くの写真を撮影したという特殊性はあるが、その影響を除いても、特に高齢者の普段からの参拝の頻度の高さは注目に値する。もちろん氏神として崇敬の念を持ち、信仰心から参詣しているというのが彼らの行動の基盤にあるのであるが、単にそれだけではなく調査参加者Oがいみじくも語っていたように「ですから天神さんは、まあ、毎日私は、あの一、運動がてら行ってますけどね。」というように、それほど形式ばらない、いわば「普段着での氏神さんとの付き合い方」が浮かび上がってきたという。

元々は近郊農村であったが宅地化され、さらに近年ではJR山陰線の高架化工事に伴って、二条駅を中心に再開発が進み、高層の建物のなども多く建設されて以前の街とは大きく姿を変えた調査地域に居住する高齢者にとって、北野天満宮は昔から変わらず、そこで執り行われる多くの年中行事によって季節の変化を感じることができる場所である。折に触れて個人でも家族と一緒に、あるいは友人と連れ立って、少し遠いが徒歩で、自転車で、または車で気軽に参詣できて、心の安らぎを得るだけでなく境内をのんびりと散歩することで健康も維持できる重要な場所として機能しているといえよう。このような機能が現在の高齢者において重要な役割を果たしているだけでなく、今回の調査参加者にも含まれていた次の世代にも受

表2 各調査参加者の撮影対象と地域コミュニティにおける意識・活動

調査参加者	撮影対象	写真とナラティブで表現された地域コミュニティにおける意識・活動
A	・ 自宅近くの道路の植え込み (図1)	・ 行政による地域環境整備への不満と自主的な管理への志向性
	・ 自宅の隣の美容室 (図2) ・ マンションの掲示板 (図3) ・ 町内のずいき祭りの子供神輿 (図4)	・ 近隣での付き合いの変化に対する寂しさ ・ 町内会長である夫の仕事の分担と活動の忙しさ ・ 地域行事に関する思い出
B	・ 近隣の住宅外観 (図5)	・ 近隣の景観・環境についての思い出と現状についての評価
	・ 再開発により設置された道路 (図6) ・ 再開発により設置された住宅街からの出口 (図7) ・ 再整備された公園 (図8)	・ 地域での再開発による新しさの肯定的評価 ・ 再開発による利便性の向上への肯定的評価と近隣での付き合いへの影響 ・ 再整備対象への思い出
	・ 自宅の隣のスーパー (図9) ・ 地元の小学校の行事 (図10) ・ お旅所のずいき神輿 (図11)	・ スーパーの進出に伴う環境の悪化 ・ 地元の小学校を通じての地域との関わり ・ 地域行事に関する思い出
D	・ 商店街の食品販売店 (図12) ・ 精肉店と商店街 (図13)	・ 地域の馴染みの商店街の評価 ・ 地域の馴染みの商店街の評価
	・ 自宅近くのスーパー (図14) ・ 自宅近くの和菓子店 (図15)	・ 地域の馴染みの商店街の評価 ・ 地域の馴染みの商店街の評価
E	・ 町内の地藏 (図16)	・ 地域の地域の自主的管理
	・ 道路で遊ぶ子どもたち (図17)	・ 地域の子ども達の現状と思い出
H	・ 自宅近くのコンビニエンスストア (図18)	・ 地域の馴染みの商店街の評価 ・ 地域の馴染みの商店街の評価
	・ 駅前コンビニエンスストア (図19)	
L	・ 自宅近くのフィットネスクラブ (図20)	・ 地域のスポーツ施設の利用 ・ 地域行司の見物
	・ ずいき祭りの神輿の巡行 (図21)	
N	・ 四条通 (図22)	・ 地域での職業生活の思い出
	・ 北野天満宮 (図23)	・ 地域施設の利用と地域行事の見物
O	・ 自宅前の道路 (図24)	・ 近隣の環境に対する不満と自主的管理
	・ 天神道とJR山陰線の高架 (図25)	・ 再開発に対する評価

け継がれているのかについては、現時点では不明であり、今後の検討課題として残されている。ただ明確には結論付けることはできないが、中年期にある調査参加者のずいき祭りとかかわり方 (図4, 図11) からは、このような機能がしっかりと受け継がれていく可能性は十分に示唆されたといつてよいであろう。また、他地域では、本研究で北野天満宮が高齢者に果たしているような役割をどのような施設が果たしているのかについて、地域間の比較も今後必要である。

JR 山陰線の高架化工事と二条駅周辺の再開発において、新しく道路が整備され、大型商業施設が開業したことについてはおおむね肯定的な評価であった (図6, 図7, 図8, 図19, 図25)。ただし、普段使う道路が変わることで住民間のコミュニケーション量の減少の問題点なども指摘されていた (図7)。住民間のコミュニケーション量の減少については、再開発の影響だけではなく、世代交代による付き合いのあり方の変化の影響も述べられていた (図2)。

植村 (1996) は写真投影法を用いた高齢期の夫婦に関する研究から、大切なものとして配偶者を撮影しない「パートナーシップなし」の夫婦の場合、特に夫において、生きがいを趣味・娯楽に置き、家族との生活のこだわりといったものをあまりもたずに自己中心の生活態度を示し、また、近隣との繋がりもうかがえないことから配偶者亡き後の孤立化が心配される、とその適応的な問題点を指摘している。2010年の国勢調査の結果では、50歳時点で一度も結婚をしたことのない者の割合を示す生涯未婚率が上昇傾向にあったが、特に1990年代以降に大きく上昇し、2010年時点で男性は20.1%、女性は10.6%となっている。そして、生涯未婚率は、今後更に上昇するものと考えられ、2030年には男性でおよそ27.6%と3.6人に1人が、女性で18.8%とおおよそ5.3人に1人が生涯未婚と見込まれている (総務省統計局, 2010)。つまり生涯未婚であるために妻とのパートナーシップをそもそも形成し得ない人々の増加が見込まれるのである。とりわけ、

男性高齢者は女性高齢者に比べて、配偶者以外に親密で支援を期待できる相手が少ないため（西村ほか，2000），今後は未婚の男性の高齢化に伴う孤立化が地域社会において大きな問題となるであろう。

これには今回の調査参加者でいえばHのケースが該当するかもしれない。もちろんHは高校卒業まで住んでいた調査対象地域に戻ってきて生活しており，また図18と図19で撮影されたコンビニエンスストアだけでなく行きつけの喫茶店なども持っている。さらにHは中京暮らしの工房でのパソコン教室に参加するなど，ある程度の近隣との繋がりを形成し，現時点で生活上の何か大きな困難を抱えているわけではない。とはいえ，地域の馴染みの商店としてコンビニエンスストアを中心にあげていることは，女性の地域商店の馴染みの商店の多様性（図12，図13，図14，図15）と比較すると乏しいと言わざるを得ないし，高校までの友人関係が現時点では失われてしまっていることから，老親の介護等の問題が生じてきたときに今後のソーシャルサポート源として期待できないという問題も存在する。小林・Liang（2011）の全国の高齢者を対象にしたコホート研究によれば，高齢者の社会的ネットワークの男女差は必ずしも普遍的なものではなく，それぞれの時代で異なる男女のライフコースの違いが，高齢期のネットワークの男女差に影響を与える可能性が示されており，生涯未婚率の上昇に伴い地域で孤立化する高齢男性の問題に関しては，詳細な調査が今後必要であろう。

謝辞：

本研究の一部は科研費若手B（代表者：岡本卓也，課題番号21730504）の助成を，また一部は先端社会研究所2009年度共同研究「他者問題に関する萌芽的研究プロジェクト」の助成を受けた。本研究の調査実施に際しては，中京暮らしの工房館の木村壽夫館長および鈴木日出生副館長（いずれも肩書は当時）にご協力いただきました。ここに記して感謝いたします。

## 引用文献

- Dennis, S. F., Gaulocher, S., Carpiano, R. M., & Brown, D. (2009) Participatory photo mapping (PPM) : Exploring an integrated method for health and place research with young people. *Health & Place*, 15, 466-473.
- Harper, D. (1988) Visual sociology : Expanding sociological vision. *The American Sociologist*, 19, 54-70.
- Kawase, J., Kurata, Y., and Yabe, N. (2012) When and where tourists are viewing. Exhibitions: Toward sophistication of GPS-Assisted Tourist Activity Surveys. *ENTER 2012 (Information and Communication Technologies in Tourism 2012)*, 415-425.
- 北野天満宮 (2014) 季節の行事案内  
[http://kitanotenmangu.or.jp/category/kitano\\_event/](http://kitanotenmangu.or.jp/category/kitano_event/) (2014年9月12日)
- 小林江里香・Liang, J. (2011) 高齢者の社会的ネットワークにおける加齢変化とコホート差 : 全国高齢者縦断調査データのマルチレベル分析 社会学評論, 62, 356-374.
- 石盛真徳・岡本卓也・加藤潤三 (2014) 写真による高齢者の地域生活把握の試み——写真・ナラティブ誘出法 (PEN-A: Photo Eliciting Narrative Approach) による写真とナラティブの内容分析を中心として コミュニティ心理学研究, 18, 42-57.
- 京都市情報館 (2010) 語りつがれるわがまち。  
<http://www.city.kyoto.lg.jp/nakagyo/page/0000038847.html> (2014年9月12日)
- 内閣府 (2014) 高齢社会対策に関する調査  
<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/kenkyu.html> (2014年9月12日)
- 西村昌記・石橋智昭・山田ゆかり・古谷野亘 (2000) 高齢期における親しい関係 : 「交遊」「相談」「信頼」の対象としての他者選択 老年社会科学, 22, 367-374.
- 岡本卓也・石盛真徳・加藤潤三 (2010) 面接調査の技法としての写真投影法 関西学院大学先端社会研究所紀要, 2, 59-69.
- 大森宏・羽生和紀・山下雅子 (2013) SLoT マップ : スナップショット・位置・テキストによる印象の集合知と街歩きマップ 日本建築学会計画系論文集, 78(683), 159-166.
- 総務省統計局 (2010) 国勢調査 e-ガイド 配偶関係——未婚率の上昇

- <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/kouhou/useful/u37.htm>
- 植村勝彦（1996）高齢期の夫婦のパートナーシップに関する社会心理学的研究  
——「写真投影法」による分析——平成6年度ジェロントロジー研究報告  
Number 2, 179-186. 財団法人 火災福祉財団.
- Wang, C., & Burris, M. (1997) Photovoice: Concept, methodology, and use for  
participatory needs assessment. *Health Education Behavior*, 24, 369-387.
- Ziller, R. C. (1990) *Photographing the self: Methods for observing personal orientations*.  
Thousand Oaks, CA, : Sage Publications.

# Investigation on Middle-aged and Elderly Participants' Psychological Sense of Community and their Community Life using the Photo Eliciting Narrative Approach : A new photo-interview and analytical approach for community research

Masanori ISHIMORI, Takuya OKAMOTO  
and Junzo KATO

## Abstract

We developed a new interview and analytical approach for use in community research. The approach was named the Photo Eliciting Narrative Approach (PEN-A), which was based on the Photo Projective Method. PEN-A is a method for understanding a participants' perceived environment by using photographs. Middle-aged and elderly participants (N=14) were provided with digital cameras and were requested to take photographs related to their daily lives in their community for about a week.

Subsequently, while watching the photographs on a monitor, we asked the participants why they had taken the particular photos. We conducted content analysis of the data that consisted of the photographs and the narratives of middle-aged and elderly participants in combination with their life stories. It showed that they actively used the facilities in their community to relax themselves and achieve psychological well-being in their daily lives. It was suggested that PEN-A could be a useful approaches for conducting community research aimed at clarifying the current living conditions of elderly people in detail.